

「では、エルダーフラワーティーでも飲みながら、チャクラの話が続けるとしよう」マグワートは再びキツンへと姿を消した。「爺さん、何か甘いものも一緒に持つて来ておくれよ」ウィザットがマグワートの後姿に追い掛けるように声を掛け、「お嬢さんも何か甘いものが食べたいだろう？」とマジヨリアルのことと巻き込んだ。

「ん〜」マジヨリアルは眉間に皺を寄せて唸った。「あれ？どうかしたのかい？」心配そうに訊ねるウィザットに「ティーに甘いお菓子…何かを思い出せそうなの気が…」とマジヨリアルは言った。

そこにティーセットをお盆に載せて戻ってきたマグワートが言葉を決めて、「お嬢さんは身なりや振る舞い、そして甘いお菓子の記憶という点からして、恐らく高貴なお方ではないかな？」「ああ、僕も実はそう感じていたよ」ウィザットもマグワートに同調して言った。

「ということで、庶民のワシの家には甘いお菓子は無いんじやよ」マグワートは口をへんの字に曲げてそう言い、続けて「代わりにドライフルーツは如何かな。ワシの手作りじや」と言った。「お、気が利くな爺さん」ウィザットはお盆に乗っていたドライフルーツを一つ摘んだ。

「さてと、ご要望のチャクラの話じやが」マグワートはティーカップにアイを注ぎながら言った。

「まずは、チャクラとは何かじやが、さっきも言ったようにそれは生命エナジーの光の渦で、人間には七つのチャクラがあると考えられておるんじや。尾髄骨の辺りが第一、お臍の下が第二、お臍と鳩尾の間が第三、胸の中心が第四、喉仏の下が第五、眉間が第六、そして頭頂部が第七チャクラじや。そこから第一は地球に向かつて、第七は宇宙に向かつて、それぞれ右回りの渦巻きでエナジーが出ておるんじやよ」マグワートは右手の人差し指でゲルグルと螺旋を描いて見せた。

「そうなのかい？僕には見えないけどなあ…」ウィザットが言うのと、「通常は見えないが、見えるものだけが真実とは限らないのがこの世の中じや」マグワートはドライフルーツを一つ摘み上げながら言った。

「それでチャクラは何の為にあるんですか？」今度はマジヨリアルが口を開いた。「一言で言えばエナジーバランスを整えるということじやな。それぞれのチャクラには司っている分野があつてな、それでバランスを取っておるんじやよ。詳しくは魔法ともえの書籍『地球に生きる宿命を光に変えて』の47ページに載つておるぞ」「え？誰だい？魔法ともえ？」問いかけるウィザットに「魔法ジユニャーナの系

列の魔法で21世紀に生きておるぞ」とマジヨリアルが答えると、「ハア？爺さんは21世紀の人とも知り合いなのかい？」とウィザットは怪訝そうな顔をした。「ははははは」マグワートは答える代わりに愉快そうに笑った。「私、魔法ジユニャーナさんにお会いしてみたいわ」マジヨリアルがティーカップを口元に運びながら言うのと、「魔法になんて会つたら蛙にされちまうぜ」とウィザットがうしろ目ドライフルーツに手を伸ばしながら言葉を挟む。「そんなことはないぞ。魔法の呪いをかけるのは黒魔法じやよ。ジユニャーナは白魔法じや



とマジヨリアルが言った。

「ん？黒に白？何か働きが違うのかい？」そう言うウィザットは摘んだドライフルーツを口にはおり込んだ。

「黒魔法は闇組の手先じやが、白魔法は女神のエナジー、つまり光と繋がつておるんじやよ。この世には光組と闇組がおるぞう」マジヨリアルはそう言うウィザットを睨んだ。「ん？光組？闇組？それは何かの組織かい？」ドライフルーツを慌てて飲み込み、ウィザットが言った。

つつく。

## チャネリング相談

**Q** 時々お泊りする仲の相手があります。私は彼のことが大好きで、出来れば結婚したいと思っています。けれど、彼に私のことが好きか聞いても、照れたような顔をして答えてくれません。しつこく聞いても、そんなこと言わないとわからない？と言われてしまいます。彼は私のことをどう思っているんでしょうか…不安です。  
(San Diego 在住 Dさん)

**A** 言葉で伝えることは大切なファクターではありますが、リレーションで一番重要なことは行動です。行動にこそ、その人の真意が現れます。但し、行動さえも演技であることもあります。または、アメリカ人のレディーファーストやオーバーな愛情表現等は子供の頃からの習慣や文化の場合もあります。

相手の行動が演技でも習慣・文化でもなく、心からのものであるかどうかを見極める一つの決め手は、あなたとの精神的な結び付きに重点を置いているか、という点です。

男女のリレーションに於いては、フィジカルな結び付きも一つのファクターではありますが、それよりも大切なものは魂の結び付きです。彼があなたに対してそちらを蔑ろにはしていないか、という点にも留意してみてください。

また、リレーションに於いてはお互いのリスペクトも必要です。彼があなたにリスペクトを持った態度で接してくれているか、という点も判断基準になると思います。

ただ、余りにも過剰に彼の行動を逐一観察するということをするれば、そこに闇が入り込み疑いの気持ちが湧いて来る場合もあります。そうなるとお互いのエナジー交換に支障が生じ、本来上手くいくものでも、破局に繋がることもありますので、神経質な程のジャッジスタンスはお勧め出来ません。

彼の気持ちを先ず信じる方向で、魂の感覚にフォローしましょう。